

アルカディアのアトリエ——カルロ・マラッティ晩年の自己表象とその環境——

高橋健一（成城大学）

英国ウィルトシャー州スタウアヘッドにあるカルロ・マラッティの二重肖像画では、野外で画布を抑えて座した作者に庇護者ニコロ・マリア・パツラヴィチーニ侯爵が歩み寄って向かい合う。作品はかつて侯爵のローマの邸宅に置かれた。画中で庇護者はアポロンの衣を纏い、名声の寓意像から月桂樹の冠を被せられようとしている。美術史家ジョヴァン・ピエトロ・ベッローリの支持を受けて頭角を現わし、ベルニーニの死後ローマ美術界の絶対的な第一人者となったマラッティは、1704年に教皇クレメンス11世からキリストの騎士の称号を授与された。描かれた画家の金鎖の十字型の飾りはその証をなしている。

本発表では作品を、美術家のアトリエを訪問する庇護者の表象の歴史に位置付ける。この二重肖像画は、《アペレスのアトリエにおけるアレクサンドロス大王》と《サルヴァートル・ローザのゲニウス》というサルヴァートル・ローザの自伝的な対版画作品に比較できる。マラッティにおける故ローザとの競争の意図を指摘したい。問題の絵画では主人公二人の間に半裸の青年が立つが、これは過去の提案通りゲニウスと同定される。本作はパツラヴィチーニ侯爵が1692年に文学アカデミー、アルカディア会に入会したのを契機に構想されたと考えられてきた。1690年にローマで設立された同会は、会員同士の平等を謳った。マラッティの図像とアルカディア会の理念との親和性を確認したい。

画中でゲニウスは侯爵に背景の「美德の神殿」の方向を示している。従来、侯爵は青年の誘導に従っているとみなされたが、彼は実際にはそれに応じず画家の場所を目指している。険しい山の上に「美德の神殿」を配したマラッティの図像は、所謂「ケベスの絵図」に負うと判断できる。しかし本来、ソクラテスの弟子に帰された短編が記述したこの絵図は、文芸、学問の専門家が集う「空虚な博識」の影響下に留まらないよう警告していた。実は17世紀の修辞学者アゴスティーノ・マスカルディは、伝ケベスの同著の注解書でこの絵図の思想を継承しつつ、当該箇所の内容に執拗な批判を展開している。本発表では、ドメニコ・マリア・カヌーティのフレスコ画の事例との比較において、マラッティ作品の創意がマスカルディの主張に適うものと論じる。

本作に見られる侯爵の態度は、文化的オティウムを希求するアルカディア会の実践にも相応しいと言える。1704年にはマラッティも同会に加入していた。絵の中のマラッティは三美神、すなわち三人の優美の女神に囲まれている。マラッティは優美の画家ラファエッロに自らを重ねている。そして彼は、盟友ベッローリが優美の画家と定義したガイド・レーニを敬愛していた。ベッローリは晩年、自らの美術家列伝の「第二部」のためにレーニ伝、アンドレア・サッキ伝、マラッティ伝を執筆している。本発表では最後に、ベッローリの仕事に対するマラッティの貢献について検討したい。